事例紹介

～大崎町の取り組み～

町長が27品目のごみ分別収集でリサイクル率80％を超えた取り組みについて発表しました。埋立処分場の延命化を目的とした行政、住民、企業の取り組みが資源リサイクル率8年連続日本一という結果につながったこと、また、JICA草の根技術協力事業において本町の取り組みが国境を越え、海外ビジネスの展開につながったことが紹介されました。

▲町の取り組みについて紹介する東町長

～大崎小学校の取り組み～

大崎小学校の6年生は、学校での取り組みとして給食の牛乳パックを洗って乾かしたり、食べ残しをダンボールコンポストで堆肥化してイチゴを栽培したことなどを発表しました。子どもたちは日頃の活動を振り返って、「ごみの分別は大変だけど大事なことだと思う。続けていると分別に慣れて苦にならなくなった。これからもきれいな町であるようにボランティア清掃なども頑張りたい。」と話しました。

子どもたちの素晴らしい発表にサミット参加者をはじめ、来場者から大きな拍手が送られました。

大崎小学校6年生が発表しました

▲サミット参加自治体からは「大崎町は子どもを含め町全体が目的を同じくして取り組んでいることが分かった。」といった声が聞こえました。

▲児童総会で決まったスローガンを発表する児童

施設見学およびサミット

11月12日（木）は、町内のごみ収集所やリサイクル関連施設の見学を行いました。岡別府自治公民館前のごみ収集所にて、資源ごみの収集風景を見学しました。早朝から地域住民が立ち会う様子や収集用のコンテナがずらりと並べられた様子に驚いていました。

志布志市有明町野神にある管理型処分場（清掃センター）や生ごみの堆肥化を行う大崎有機工場、資源ごみの中間処理を行う㈲そおリサイクルセンターを見学し、大崎町のごみ分別の手法やリサイクル工程について説明がありました。

また、サミットでは大崎町をはじめ各自治体の先進的な取組事例や課題が紹介され、各自治体首長らにより今後のごみ減量・資源化の方策などについて活発な議論が交わされました。また、同じ志を持つ自治体が連携して取り組むことの必要性・重要性について再確認されました。

▲サミットの様子